

多治見方言における名詞のアクセント

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第 62 号抜刷

2015年2月

多治見方言における名詞のアクセント

安藤 智子

0. 本稿のねらい

多治見市を含む岐阜県の方言は、南西部の京阪式アクセントあるいは垂井式アクセントを持つ限られた地域を除くと、大半の地域においてアクセントは東京式であるとされる。そのうち県南東部の中輪東京式アクセントの地域を除く大部分は内輪東京式とされ、金田一（1977）等の分布図を見る限り多治見市もここに含まれると見られる。しかし、これらの地域を分ける境界線はすべての項目で一致するわけではなく、一つの地点においてある項目で中輪式のアクセントを示しながら別の項目では内輪式のアクセントを持つということも少なくない。

本稿は、この境界線に近い東濃地方西部に位置する多治見方言における名詞のアクセントをさまざまな角度から検討する。多治見市という地域が二つの体系の狭間でどのように位置づけられるかを探り、さらにこの地域の特徴を炙り出す目的で、内輪式／中輪式の区別との関係が指摘されていない語や金田一（1974）¹⁾、国語学会編（1980: 8f）等々に示された語類の中に含まれていない個別の語においても、共通語との異同を中心に報告する。

1. 調査項目の選定に関わる先行研究の概観

1.1 内輪東京式と中輪東京式の相違

本節では、調査語彙の選定のために、東濃地方西部のアクセントの特徴に関わる東京式アクセントの下位区分についての先行研究を検討する。

岐阜県内で東京式アクセントを持つ地域のうち、ほとんどの地域が内輪東京式アクセントを持つとされるが、金田一（1977）等の分布図によれば美濃地方の南東部（恵那市南部・中津川市南部）には中輪東京式の地域がある。

内輪式と中輪式の主な相違点は、山口（1984）を参考にまとめると表1のようになる。

表1 内輪式と中輪式の主な相違点（山口（1984）による）

	1拍名詞			3・4拍形容詞終止形		3・4拍動詞終止形	
	一類	二類	三類	一類	二類	一類	二類
内輪式	無核	有核	有核	有核	有核	有核	有核
中輪式	無核	無核	有核	無核	有核	無核	有核

このように、内輪式と中輪式の相違点は名詞・形容詞・動詞にわたるが、本稿ではそのうち

の名詞について検討する。

柴田（1950）は、愛知県方言のうち岡崎などと名古屋などでアクセントが対立する語として、1拍名詞「毛・名・値・葉・日」と形容詞「赤い・厚い・甘い；明るい・危ない」などのほか、3拍名詞「卵・油・力」を挙げ、それぞれの境界線を図に示している。このうち「力」（三類）は柴田（1950）においてそれ一語で「IX6」類とされ、名古屋などで中高型、岡崎などで尾高型、豊橋などで平板型と3つの東京式内部の区別を示している。また、「卵」（七類）一語を「IX2」類、「油」（五類）一語を「IX5」類とし、名古屋などと岡崎・豊橋などとの地域を分ける特徴として挙げている。これに対し前川（1957: 213）は「一語では体系を示さない」、山口（1985: 15）は「単なる単語の例にとどまる（単語ごとにたくさんの境界線がありうる）から『卵・油』のみをとりたてるわけにはいかない」として、これらの語の扱いについては賛成していない。

一方、金田一（1978: 2）もまた「卵」「油」は個別的な変異と見て考察から除外しているが、1拍の「葉」「日」（二類）が有核になることと並んで3拍の「力」（三類）が中高型になることを西三河式（中輪式）と異なる尾張式（内輪式）の特徴として挙げている。金田一（1978: 2）を参考に尾張式と西三河式および東京との名詞に関わる相違点をまとめ、さらに東三河式（外輪式）も合わせて比較すると、表2のようになる。

表2 東京式諸方言アクセントの相違点（金田一（1987: 2）による）

語例	尾張式 (内輪式)	西三河式 (中輪式)	東京	東三河式 (外輪式)
葉が, 日が	●○	○●	○●	○●
力が	○●○○	○●●○	○●●○	○●●●
命が, 姿が	○●○○	○●○○	●○○○	●○○○

金田一（1978: 3）は、このうち「力」について、「『力』一語であるが、そのアクセントは、その【尾張式（内輪式）・東三河式（外輪式）・西三河式および東京（中輪式）の】ちがいをもつとも端的に示している」（【 】内は安藤による）と述べている。

なお、山口や金田一などの一連の論考における主張の相違は、個別的に見える3拍名詞のアクセントの相違を中輪式／内輪式の分別に結び付けるかどうかという点にとどまらず、それぞれのアクセント体系の成立過程についての見方にも及ぶが、本稿はその歴史的過程にまで言及するものではない。

1.2 東濃地方にアクセントの境界線を持つ語

奥村（1976）は、中輪式と内輪式の相違に関する項目のうち、1拍二類名詞「名・葉・日・矢」が東濃地方東部（加子母村（現・中津川市北部）など）では無核、東濃地方西部（可児市今渡

など)で有核になるデータを挙げている。

このほか、奥村(1976)は、東京で頭高型の疑問詞「なに・いつ」等が東濃北部で頭高型に対して東濃南部で平板型になることと、3拍五類名詞に含まれる和語「涙・命・姿・ざくろ²⁾・火箸」について、東京で頭高型であるのに対して東濃地方では年齢の高い層を中心に中高型となることを示している。山口(1992)はこれを受けて、それまで「中輪式(東京的)」としていた加子母村のアクセントのうち名詞では3拍の和語「命・姿・火箸・狸……」が東京と異なることを認めているが、これについては中輪式・内輪式の区別とは「別の範疇のものと思われるので考察を保留しておく」と述べている。

ここまで見てきた先行研究をまとめると、内輪式と中輪式との区分をするのに用いるべき名詞関連の項目として、1拍二類名詞は外せないが、他にこの地域にアクセントの境界線を持ちうる項目として、疑問詞と3拍名詞があることがわかる。筆者の観察でも、奥村(1976)の指摘する点以外に、2～3拍名詞に多数の個別的な東京方言との相違があり、本稿ではこれらについても確認するが、疑問詞については稿を改める。

1.3 内輪東京式と中輪東京式の境界

先に述べたように、奥村(1976)は、中輪式と内輪式の相違に関する項目のうち1拍二類名詞「名・葉・日・矢」の地図データを示している。これを見ると、岐阜県内で4語すべて無核となるのは現在の中津川市や恵那市など南東部のみである。有核と無核の境界線はいずれの語でも北部では加子母村(現・中津川市北部)の西端を通っているが、南部では「名」の境界線のみが可児町(多治見市の北～北西に位置する現・可児市)を通して愛知県側へ抜け(ただし多治見市内では北西部の根本町で混用、中央部の田代町で無核)、「葉・日・矢」の境界線は混用地帯となる多治見市田代町を通っているとされている(根本町では有核)。つまり、少なくとも「葉・日・矢」については市北西部で内輪式の特徴を示したことが確認でき、この境界線に従えば多治見市の少なくとも田代町以南は1拍二類名詞に関して中輪式の特徴を示していることになる。しかし、同書では多治見市内は田代町以南に調査地点を持たないため、市南部が中輪式だと言えるのか、それとも混用地帯が広がっているのかは捉えられないはずである。実際、同書(p. 248)の地図データを表にまとめたものを見ると、多治見市はひとまとめにして4語とも混用の扱いである。

山口(1984: 7)でも、奥村(1976)を含む先行研究を挙げて「可児町白川町以東のいわゆる東濃地方は中輪式と見なされる」と述べ、美濃大半は内輪、東濃は中輪などとしていた。しかし、後に山口(1992: 43)ではこの論文を指して、次のように述べている。

内輪……飛騨, 美濃大半, 尾張

中輪……東濃, 西三河

外輪……東三河

のように「美濃大半」と「東濃」を分けたのであるが、その後の調査により、その分類上の意義はあまり大きくないことを改めて述べなければならない。結局、「西濃」が「京阪式、垂井式、（東京）内輪式」を擁して複雑を極めるのに、「中・東濃」は変化がない。こ地域は全体的に「（東京）内輪式」性格が強いとは言え東部に「（東京）中輪式」性格が強いものがあるという程度にとどまる。（山口（1992: 43）、原文ママ）

さらに、山口（1992: 43）は奥村（1976）による東濃地方北東部の加子母村（金田一（1977）等の分布図によれば内輪式）の記述を参照し、3拍の一段動詞と形容詞について尾張の内輪式および中・外輪式と比較し、次のように述べている。

これと比べると、加子母村アクセントは

1類一段動詞 0

全形容詞, 2類一段動詞 2

であって、「尾張型内輪」より「中輪寄り」である。しかもこの加子母村アクセントと同質のものが「岐阜県下のアクセント（5）」で取り上げた揖斐郡外津汲、日坂にも共通し、岐阜県内の内輪式地域では、大垣市内も同様である。このさい「尾張型」を「内輪式A型」として上述「中・東濃型」については「内輪式B型」とするのがふさわしい。（山口1992: 47）

この山口（1992）の説明を動詞・形容詞の記述と合わせてまとめると表3のようになる。表ではアクセント型を、語頭から数えたアクセント核の位置により丸囲み数字で示す（以下同様）。

表3 内輪式A/B型と中輪式・外輪式の比較（山口（1992）による）

	尾張型内輪 (内輪式A型)	加子母村・大垣市内等 (内輪式B型)	中輪・外輪
1拍二類名詞	①	①	①
3拍一類一段動詞	②	①	①
4拍一類一段動詞	③	①	①
3拍一類形容詞	②	②	①
4拍一類形容詞	③	③	①
3拍二類一段動詞・3拍二類形容詞	②	②	②
4拍二類一段動詞・4拍二類形容詞	③	③	③

この山口の変更は山口（2003）に反映されている。山口（1984: 8）から転載された山口（2003: 39）の「東海地方の[垂井式（近輪式）＝内輪式－中輪式－外輪式]移行制配置図」では東濃地方全域を中輪式としているが、山口（2003）巻末の「全国方言アクセント区分図」では中津川市南部・恵那市南部（および瑞浪市南部か）を中輪式地域に残し、加子母を含む東濃の広い範囲を内輪式に入れている。一方、本文中（山口2003: 40）では「東濃は近年内輪式アクセン

ト（1拍名詞2類語が語によって○→○ㇿ）の傾向が強まっている。」とし、通時的な変化について述べている。³⁾

この山口（2003）で中輪式から内輪式への変更の対象となった地域を図から読み取ると、東濃北部（現、中津川市加子母辺り）から東濃南西部（多治見市・土岐市・瑞浪市）にかけての地域および中濃東部（白川町・七宗町から可児市東部辺り）である。しかし、この変更を述べた山口（1992）の調査では、可児市・多治見市・土岐市など、変更の対象に入りながら調査が明示されていない地域があり、他の内輪・中輪式地域との異同の見直しによる変更と言えるのか、それとも近年のアクセントの実態の変化によってこの地域が内輪に組み込まれることになったのか、わかりにくくなっている。本稿の報告は調査時期が異なるが、この点について多治見の各地点が今どうなっているかを捉える手続きの一部を成すことになる。

当然、境界線は語によって異なることがありうるため、「式」という枠でくくるには中間的な地帯も存在することになる。上述の奥村（1976）のデータによれば、多治見市は1拍名詞2類に関してその中間的な地帯に属するということになる。上に引用した山口（1992: 47）にあるように中輪式に近い内輪式を内輪式B型と呼ぶなどして区分すれば、さらに多くの型が区分される可能性があるし、それでもなお明確に区分できない地域も存在するであろう。このことを踏まえたうえで、本稿では、以下、現在の多治見市各地点において内輪・中輪の相違点に相当する名詞項目を中心にアクセントの調査を行い、現況を記録しておく。

2. 調査方法

本節では、3節～8節で結果を考察する調査について共通する方法や手続きを記述する。

調査時期：2013年9月

調査対象地域：多治見市立の13小学校の校区のうち、新興住宅地が大半を占める北栄小学校校区および脇之島小学校校区の2校区を除く表4の11校区（図1参照）とする。

表4 調査対象地域⁴⁾

小学校	位置、校区内の駅等	1934年初頭の区分・位置
南姫	最北西部、JR太多線姫駅	可児郡姫治村
根本	北部、JR太多線根本駅	可児郡小泉村北部
小泉	西部、JR太多線小泉駅	可児郡小泉村南部
池田	南西部、下街道宿場町、土岐川右岸	可児郡池田村
精華	中央北部、JR多治見駅、土岐川右岸	可児郡豊岡町南西部
共栄	北東部、土岐川右岸	可児郡豊岡町北東部
養正	東部、土岐川左岸	土岐郡多治見町東部
昭和	中央南部、土岐川左岸および右岸	土岐郡多治見町西部
市之倉	南部、JR中央本線古虎溪駅、土岐川左岸	土岐郡市之倉村
滝呂	南東部	土岐郡笠原町北部
笠原	最南東部	土岐郡笠原町南部

調査対象者：各調査対象地域
 校区において生え抜きの
 1934～1955年生まれの3
 名（市之倉小学校のみ4名）
 で、合計34名とする。以下、
 個人を表5の記号により表示
 する。記号冒頭の漢字は小学
 校校区、数字は西暦の生年下
 2桁、末尾のm/fは性別（男
 性／女性）を示す。表5に示
 した生育地はすべて多治見市
 内の町名である。

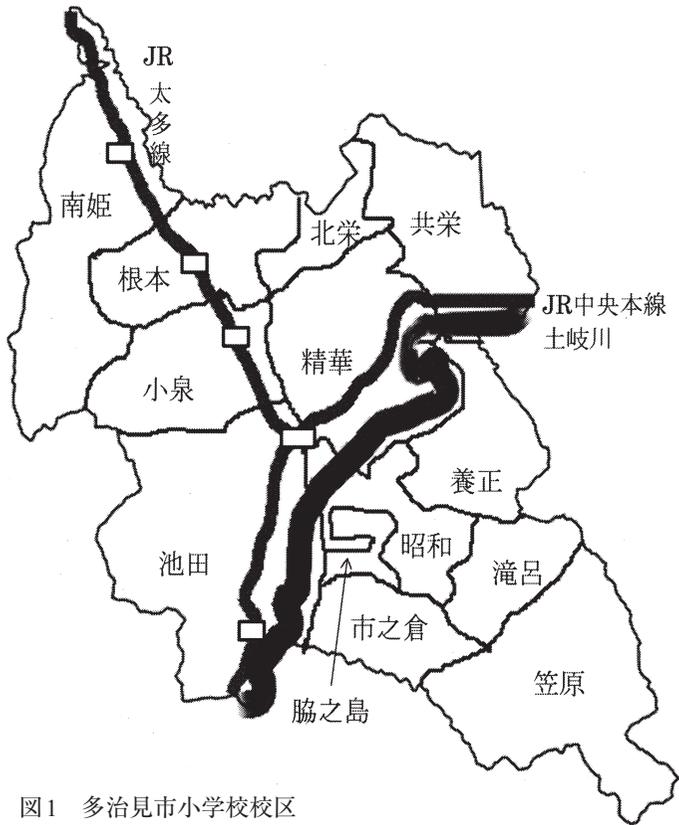


図1 多治見市小学校校区

表5 調査対象者

記号	生育地	記号	生育地	記号	生育地
南41f	大藪	精37m	大正	市41m	市之倉
南42m	大藪	精40m	本	市44m	市之倉
南50m	姫	精44m	小田	市45f	市之倉
根38m	根本	共47ma	小名田	市47m	市之倉
根40m	根本	共47mb	高田	滝40m	滝呂
根41m	根本	共47f	高田	滝45m	滝呂
小34m	小泉	養49ma	平野	滝48m	滝呂
小35m	小泉	養49mb	上	笠46m	笠原
小50m	小泉	養52f	生田	笠48f	笠原
池36m	池田	昭34m	田代	笠49m	笠原
池37m	池田	昭41m	錦		
池47m	池田	昭48f	錦		

調査方法：PC画面上にMicrosoft PowerPointにより調査対象語を含む短文（読み上げ文）を表示し、読み上げを依頼する。読み上げ文は筆者の内省により方言文を用意するが、読み上げ文が被調査者の普段の言い方と異なる場合には普段の言い方を求める。

記録：マイクロフォン（SONY ECM-PCV80U）を通じICレコーダー（Ediroll R-05）により録音する。

分析：筆者が録音を2度確認しながらアクセント型の聞き取りを行う。ピッチ変化が微妙な場合はSIL Speech Analyzerのピッチ曲線表示機能により判定する。

調査語選定の概要：3～5節で検討する1～3拍の名詞は、まず国語学会編（1980: 8f）に挙げられた各語類の所属語から、親密度の高い語を調査に用いる。親密度の判定にはNTTデータベースシリーズ『日本語の語彙特性』に採録されている語の「単語親密度」のうち主として「文字音声単語親密度」を用いる（「音声単語親密度」でなく「文字音声単語親密度」を優先するのは、読み上げ式の調査に支障がないようにするためである）。被験者に示す表記もこれに従い、複数の表記がある場合は親密度の最も高い表記を用いた（さらに誤読の恐れがある場合には読み仮名を括弧に入れて示した）。さらに、先行研究との比較のために、語類に含まれない2～5拍の和語、漢語、外来語を調査語に含め（4～6節）、今後の体系的記述のために月名と地名を追加した（7・8節）。

以下では、節ごとに調査対象語の詳しい選定方法と調査結果について述べる。調査によって得られた発音には、安藤（2013）で検討された連母音の長母音化が生じているものもあるが、本稿の分析ではアクセントのみに焦点を絞り、長母音化による異形態は連母音のままの形態と区別せずに扱った。ただし、音の脱落などにより拍数の異なる形態や子音の交替については別に指摘する。また、水谷（1960a, b）が名古屋方言アクセントについて指摘しているような遅上がりの現象が多治見方言でも観察されるが、これは自然発話のイントネーションの中で捉えるべきものと考え、読み上げによる本稿の調査結果はピッチの顕著な下降（アクセント核）の位置のみを記述する。

3. 1 拍名詞のアクセント

3.1 調査対象語

1拍名詞については、内輪式・中輪式の境界に関わる語類のアクセントの問題が中心であるため、語類に関係する語のみを取り上げることにする。各語類の所属語が厳密に定まっているわけではないため、ここでは国語学会編（1980: 8f）に挙げられた語類の語例を中心に、各先行研究を参照しつつ、調査語を決定する。

まず、国語学会編（1980: 8f）に示された各語類の語例のうち、親密度の高い語を調査に用いる。特に内輪式と中輪式の違いに関わる二類で、文字音声親密度が6.000以上の語が国語学会編（1980: 8f）のリストの中に4語あるのに合わせて、各語類の文字音声親密度上位4語（4位が同値の場合は「音声単語親密度」の高い方）であった語を調査する。また、国語学会編（1980:

8f) に挙げられていない「毛」は親密度が高く(6.281)、金田一(2001)および山口(1992)では二類とされている。しかし、金田一(1974: 63)では「現代諸方言からでは何類に入れてよいか不明の語」「第1類か第2類か」とされており、上野(1982)では「第x類」とされている。扱いの難しい語であるため、ここで問題となる二類に関わるその他の語として、調査対象に含める。さらに、山口(1992)では中濃・東濃における調査で個人差ないし地域差が見られた語をグロットグラムで示しており、そこに含まれる一類の「柄」「巢」と二類の「値」を調査対象として追加する。

このように選定した調査語を以下に示す。調査時に、例えば「鍋の柄[え]が取れた。」のように読み仮名をインフォーマントに提示した語には、ここではルビを付ける。読み仮名以外の表記についてはインフォーマントに提示したとおりであり、諸文献とは必ずしも一致しない。このリストにおける表示順は親密度上位4語までは親密度の高い順であり、親密度が同じ場合は五十音順とする。それ以外に追加した語については「;」の後に五十音順に記す(インフォーマントに示した順はランダムであるため、ここでの表示順と一致しない)。

1拍名詞一類 血・子・実・戸;柄^え・巢

1拍名詞二類 名・日・葉・矢^ね×;値

1拍名詞三類 木・手・目・火

その他の1拍名詞 毛

なお、二類の「日」は「太陽」「日柄」「日照時間」といったさまざまな意味で用いられ、それによるアクセントの違いがあることも考えられる。下野(1993)の名古屋市の調査を参考に、この語については別の意味となる3文「山から日が昇る」(太陽の意)、「今日は日がええ」(日柄の意)、「夏は日が高い」(日照時間の意)を読み上げ文に含めた。

二類の「矢」は、国語学会編(1980: 8f)や金田一(1974: 62)において「×矢」「矢×」と標示されており、この「×」の印は現代の東京において語類から推定されるアクセントと一致しないことを示す。「矢」の共通語としてのアクセントは、NHK放送文化研究所編(1998)『NHK日本語発音アクセント辞典』(以下、『NHK』と略記する)や秋永一枝編(2001)『新明解日本語アクセント辞典』(以下、『新明解』と略記する)、によると他の二類の語のような無核(⑩型)ではなく、有核(①型)である。

3.2 調査結果と考察

1拍名詞のうち、一類の親密度上位4語はほぼ無核、三類の親密度上位4語はほぼ有核であり、東京式アクセントの地域として予測されるとおりの結果であった。これに逸脱する例があったのは一類の「実」、三類の「火」の2語である。一類の「実」は34名中3名が有核で発音したが、3名とも1940年以前の生まれで市中央から北西部の生育であるという共通点があった(小

34m, 根38m, 精40m)。一方, 三類の「火」は3名(小34m, 池36m, 笠49m)が無核で発音したが, 地域や年齢による偏りは指摘できない。

山口(1992)で個人差ないし地域差が指摘された一類の2語「柄」「巢」については, 表6のような分布となった。表6では「実」の結果と合わせて, 各校区において有核で発音する人数(市之倉では4名中, 他では3名中的人数であり, 言い直して二通りの発音をした人は0.5名と計算)を集計している。「柄」を有核としたのは精37m, 昭41m, 南42mの3名で, 上記の一類「実」を有核とした3名とは重ならないことから, これらの逸脱は偶発的な個人差と見られる。

表6 「実」「柄」「巢」(一類)の校区別アクセント(有核の人数)

	南	根	小	池	精	共	養	昭	市	滝	笠	(計)
実	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3
柄	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3
巢	1	3	1	0	1	0	1	2	0.5	0	0	9.5

一方, 「巢」の有核は全体の3分の1ほどに見られ, 地域的には中央部から西部にかけて比較的多く観察された。東京でも秋永(1958: 26)によれば48歳(1910年頃生まれか)以下の世代で「巢」の有核が徐々に増しており, 馬瀬・佐藤編(1985)で本稿の対象と同じ世代(1930年代~1950年代生まれ)を見ても有核が多数派となっていることから, 有核化はこの地域の西部に限ったことではなく, むしろ無核の方が多く多治見では東京式としては本稿の調査の時点で古い形が残っていると言える。

次に, 1拍名詞のうち, 二類の親密度上位4語および山口(1992)で個人差ないし地域差が指摘された「値」, さらに二類に所属するかどうか文献によって分かれている「毛」の結果を表7に示す。表7では各校区において有核で発音する人数(市之倉では4名中, 他では3名中的人数であり, 二通りの発音をした人は0.5名と計算)を集計する。なお, 調査対象者の年齢の幅の中で年齢による差は見られなかった。

表7 1拍二類名詞および「毛」の校区別アクセント(有核の人数)

	北西部					中央~東部				南部			(計)
	南	根	小	池	精	共	養	昭	市	滝	笠		
名	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	
葉	3	3	3	3	3	3	3	2	2	0	1	26	
日(太陽)	3	2	3	3	2	1	1	1	0	0	0	16	
日(日照)	1	2	1	3	2	0	1	0	0	0	0	10	
日(日柄)	1	2	0	0	0.5	0	0	0	0	0	0	3.5	
矢	2	1	1	1	3	1	2	1	0	0	0	12	
値	2	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	5	
毛	0	1.5	1	0	1	0	1	1	0	0	0	5.5	
(計)	14	11.5	11	10	12.5	5	8	6	2	0	1	81	

まず、結果を語ごとに見ると、親密度上位4語のうち「名」を有核で発音する人がとりわけ少なく、これは奥村（1976: 249）の「名」のアクセント地図で多治見市全域が無核（平板型）とされていることと矛盾しない。周辺地域に関する先行研究を見ても、多治見市から十数キロメートル東に位置する瑞浪市での調査（小川1999）では、二類の他の語では有核が散見されるのに対して「名」の有核はまったく見られないし、多治見市から約30キロメートル南西に位置する名古屋市での調査（下野1993）でも他の二類の語に比べて有核が非常に少ない。

「葉」は奥村（1976: 250）では北西部の狭い地域を除いて無核とされているのに対し、今回の調査結果では南部を除く広い範囲で有核の発音が優勢であるが、市内に境界線があることを示唆する結果としては同じ方向性を持つ。「葉」は南部でも若干の有核が見られ、市全体では非常に有核の数が多い。これについて、名古屋市の大学生を調査した山田・正木（1991: 1）はやはり「葉」の有核が他の語（「柄」「毛」「日」）に比べて多いことを指摘し、「理由はいろいろ考えられるが、そのうちの一つに、この『葉』という語が日常生活の中で使われる率が、マスコミに現れる率より高いことによる事であろう」と述べている。すなわち、マスコミの音声での出現頻度に対して日常会話での使用頻度が高い語ほど方言アクセントが残り、共通語化しにくいという指摘である。

「日」は意味によって結果が異なっており、太陽の意>日照時間の意>日柄の意の順で有核が多い。これも名古屋市での調査（下野1993）と共通する結果である。それぞれの意味での語の使用頻度は調べられていないが、日柄の意味での使用頻度は他に比べて低いと考えられ、これの有核が最も少ない。また、上記のように有核の少ない「名」（音声単語親密度4.875）は「名前」（同6.656）、また同じく有核の少ない「値」（同5.000）は「値段」（同6.219）などの類義語を常用するため、少なくとも音声言語としての使用頻度は高くないと考えられることから、こうした使用頻度あるいは親密度もアクセントの変化に関係している可能性が考えられる。

「矢」も南部で全く無核であるのに対し、その他の地域ではある程度の有核が観察され、奥村の地図（1976: 251f）と大きくは異ならない。ただし、この語は『NHK』などでも有核とされており、共通語化の観点からは他の語とは別に扱わなければならない。

「毛」も有核の出現数は少ないが、他の語と同様に北西部から中央～東部に分布する。この語は「親密度」で言えば「葉」や「日」に劣らず高い値を示しており、日常会話での使用頻度も高いものであると思われるが、「葉」などと比べて有核の数が少ない。3.1で触れたように、もともとこの語は二類に含めるかどうか、見解が一致していないものであることからすると、多治見においても二類の他の語とまったく同じような分布はしていなかった可能性もある。例えば、老年層で二類が無核となる愛知県長久手町での中学生対象の調査（山田1992）では、二類が有核となる名古屋市（「矢」については東京も）からの影響を受けて、中学生は「葉」「矢」で有核が圧倒的になっているのに対し、この「毛」は無核が圧倒的である。これは、無核の「毛」

がその使用頻度の高さによって保たれたと見ることができる。だとすれば、多治見市北西部においても「毛」は他の二類語と違ってもともと無核であり、それが名古屋等からの影響で（下野（1993）によれば名古屋市において1969年以前の生まれの世代では有核が8割を超える）わずかに有核化したものである可能性もある。

次に、校区による相違に着目する。市の南部に位置する笠原・滝呂・市之倉の3小学校区ではほとんど無核であるのに対し、それ以外の校区には話者によって、また語によって有核が見られる。特に、市の北西部に位置する精華・池田・小泉・根本・南姫の5校区で有核が多く、市の中央部から東部にかけての昭和・共栄・養正の3地区は中間的である。地理と結びつけてみれば、有核の多い北西部は土岐川右岸から北に位置し、中央～東部の中間的な地域は土岐川の右岸と左岸にまたがり、無核の南部は市之倉の一部を除いて土岐川左岸から離れた地域にある。

では、1拍二類名詞のアクセントの境界線⁵⁾ および変化の方向性をどのように考えるべきだろうか。三つの可能性を考えてみる。

一つ目としては、現在の共通語化（言い換えれば、中輪化）の影響を考えれば、有核の地域に後から無核が起きているものと考えることができ、仮に市全域が過去に有核であったとすると、北西部にはわずかに、南部には強い共通語化が生じていることになる。しかし、ほぼ無核の南部は交通の不便な地域でもあり、ここでのみ共通語化が完了していると考えるよりは、少なくとも南部は元来平板式であったと考えるほうが自然である。

二つ目は、仮に過去において市内が全体的に無核であったとして、中央～東部から北西部にかけて名古屋方面あるいは岐阜県内他地域の内輪式の影響をうけて有核化が生じているという仮説である。山口（2003: 40）の「東濃は近年内輪式アクセント（1拍名詞2類語が語によって○→○ㇿ）の傾向が強まっている。」という記述はこの仮説を支持することになる。

三つ目は、およそ土岐川を境に、左岸では無核、右岸では有核という分布が過去のある時代にあったという仮説である。この分布が、陶磁器等生産品の集積地であり下街道が通っていた中心部で混じり合うのは自然なことである。そうであるとすれば、現在ではJR太多線の通る北西部にも中央部あるいは共通語の影響がいくらか及んでいると見ることになり、南部ではほとんど変化が起きていないということになる。

さらに、上記の一類「実」「柄」「巢」でも南部で無核が保たれ、そのほかの地域、特に北西部で有核が散発していることから、北西部を中心に無核から有核への変化が語類の枠を超えて生じているとも考えられる。もしくは、上記三つ目の仮説が正しければ、もともと有核の1拍名詞（二類）の多い北西部で一類の語の一部にも類推が及んだ、あるいは「毛」もともと無核であって、その同じ流れに巻き込まれてわずかに有核が現れるようになったと考えることも可能である。

4.2 拍名詞のアクセント

4.1 調査対象語

2拍名詞の調査対象語として、1拍名詞と同様に各語類から親密度上位4語を取り上げる。またこれに、周辺の地域に関する先行研究との比較に資する語（「靴」「下駄」「坂」「弦」）および現代の共通語と異なることが筆者の内省から推定される語（「事／こと」「鈴」「蝉」）を加える。このうち、「鈴」と「坂」は国語学会編（1980: 8f）には掲載されていないが、金田一（1974）に従い「鈴」を一類、「坂」を三類に入れておく。以下がその調査語のリストである。

- 2拍名詞一類 風・口・酒・水；鈴
- 2拍名詞二類 人×・夏・紙・雪；蝉×・弦
- 2拍名詞三類 月・花・耳・犬；靴・事／こと・坂
- 2拍名詞四類 父×・海・今日・肩；下駄×
- 2拍名詞五類 声・雨・春・秋

二類の「人」は、共通語において先行する修飾句の有無で②型と①型が交替することから、修飾句の有無により「人が来た」「人が見とる」「人がしゃべるとるのに割り込むな」；「知らん人が来た」「えらい人が来た」の計5文を用いた。三類の「事」は形式名詞「こと」を含め、「変な事があった」「その事は知らん」「事が大きなる」「行ったことがある」「読んだことがある」の5文を用いた。

さらに類別語彙以外の和語・漢語・外来語を杉藤（1990）『全国共通項目調査票（1）調査者用 改訂版』（以下では『全国共通項目調査票』と略す）の所属語彙から、先行研究との対照に資することを優先して次のとおり選定した。

- 漢語：医者・世話・地図
- 外来語：ゴム・ジャム・バス・パン

4.2 調査結果と考察

2拍名詞は内輪・中輪の違いとの関係も指摘されておらず、特定の語類が市内の地区によって異なる結果を示すということはなかった。また、調査対象者の年齢幅の中では年代差は見られなかった。

まず、市全域で『NHK』の記載と同じアクセントが見られた語を挙げる。

- ①型 一類：風・口・酒・水，漢語：医者
- ②型 二類：夏・紙・雪，三類：月・花・耳・犬，漢語：世話
- ①型 四類：海・今日・肩，五類：声・雨・春・秋，漢語：地図，外来語：ゴム・ジャム・バス・パン

各語類の親密度上位4語のほとんど（二類「人」および四類「父」以外）と漢語・外来語が

ここに該当する。二類「紙」で1名（滝40m）が、漢語「世話」で1名（養49ma）がそれぞれ①型で発音したほかは、全員が同じアクセント型であった。

次に、地域によりアクセント型にばらつきのあった語について検討する。各語類の親密度上位4語に含まれない語のうち、二類「弦」、四類「下駄」の2語は、全体としてはそれぞれ②型、①型となったが、各数名の話者が揃って異なるアクセントを示した。具体的には、「弦」は小34m、池37m、精19m、共47mbの北西部4名、「下駄」は笠46m、滝45m、市44m、養52fの南東部4名が①型で発音した。「弦」は『NHK』では②型、①型の順で共に挙げられているが、山口（1992）で中・東濃の各地ですべて②型とされており、①型がどのように分布しているか興味深いところである。東京では、馬瀬・佐藤編（1985）のデータでは1935年生まれ以降の話者に①型が混じるが、本稿の調査範囲では生年による偏りは見られない。「下駄」は『NHK』では①型のみ記載となっているが、山口（1992）では関市の話者で①型、美濃市の話者で②型、各務原市の話者で①②両用、他の13名が①型、名古屋市の調査（下野1993）で80名中2名が①型、他は①型となっており、濃尾広域にわずかにアクセントのゆれが見られる。

次に、話者により、また調査文により結果にばらつきがあった「事／こと」について述べる。「事」は一般に東京で②型となる三類に属し、『NHK』でも②型とされる。本調査では、修飾要素なしで「事態」を意味する「事が大きなる（＝大きくなる）」、修飾要素付きで「出来事・事柄」意味する「変な事があった」（「変な」は①型）および「その事は知らん」（「その」は①型）、形式名詞として「経験」を表す「読んだことがある」（「読んだ」は①型）および「行ったことがある」（「行った」は①型）の5文を用いた。その結果、「事が大きなる」では全員が②型となった。「変な事があった」「読んだことがある」では有核の修飾語が先行するためその後のピッチ下降が小さく、②型と①型との判別が難しい例があり、特に「こと」が形式名詞となる「読んだことがある」では①型とすべき平坦に近いアクセントも見られた。また、「読んだことがある」で2名、「そのことは知らん」で9名（うち、精44mは「ことは」を[kotaa]と発音）、「行ったことがある」で10名が①型を示した。①型の修飾要素が付く場合に3割近く①型が出現していることになるが、地域や生年による偏りは見られない。

一方、次の語は、すべてあるいはほとんどの話者において『NHK』で第一に挙げられる型とは異なるアクセントが見られた。

- ・ 「人」が属する二類は一般に東京で②型となるが、「人」には東京で②型とならないことを示す×印が付いており、『NHK』では前に「問題の～」等の修飾要素が付く場合には②型、それ以外の場合は①型とされる。本調査では、修飾要素が先行する「知らん人が来た」（「知らん」は①型）、「えらい人が来た」（「えらい」は②型）だけでなく、修飾要素の付かない「人が来た」「人が見とる（＝見ている）」「人がしゃべるとのりに割り込むな」においても、すべて②型で発音された。よって、二類の本来の型が修

飾要素の有無に関わらず保たれていると見られる。

- ・「父」は一般に東京で①型となる四類に属するが、『NHK』では②型、①型の順で挙げられている。②型が優勢となるのは1拍目の母音の無声化によるものである。本調査では全員が①型で発音しており、母音の無声化が少ないこの地域で、四類のアクセントが保たれていると考えられる。
- ・「蟬」は金田一（1974: 63）や国語学会編（1980: 8f）で二類（一般に東京で②型）に入れられるが東京で②型とならないことを示す×印が付いており、『NHK』では①型である（山口（1992: 49）では一類（一般に東京で①型）とされる）。本調査では全員が②型で発音しており、東京と違って二類本来のアクセントが保たれているということになる。
- ・「鈴」は国語学会編（1980: 8f）には掲載されていないが金田一（1974: 63）で一類（一般に東京で①型）に挙げられており、『NHK』でも①型とされるが、本調査では全員が②型で発音した。この理由は不明であるが、後述するように当該方言では起伏式の傾向が強いことが考えられる。
- ・「靴」「坂」は国語学会編（1980: 8f）には掲載がないものの各文献で三類（一般に東京で②型）に挙げられており、『NHK』でも②型とされるが、本調査ではほとんどの話者が①型とした。例外は「靴」を共47maの1名、「坂」を小34m, 小35m, 南42mの3名が②型に発音したのみである。この2語は、中濃・東濃の各地域（多治見市・土岐市・可児市など本稿調査対象地域とその隣接地は含まれていない）を調べた山口（1992）では②型となっているが、名古屋市における調査（下野1993）では①型が圧倒的に優勢であり、市全域に名古屋方面の影響が考えられる。

以上のように、2拍名詞の語類に属する語には、『NHK』等との記載とは異なるものが見られた。特に、東京で①型の語を当地域で①型ないし②型で発音するケースが多々見られるのに対し、東京で有核のものを当地域で平板とすることはほとんどない。そして、各語類から予測されるアクセント型が東京で異なる場合（×印付き）にも、当地域では語類から東京式として予測されるとおりのアクセントを示している場合があった。

5. 3拍名詞のアクセント

5.1 調査対象語

3拍名詞の語類は所属語彙が不確定な部分や語類から推定されるアクセントから逸脱するケースが少なくないことが知られているが、ここでは1, 2拍名詞と同様に各語類で親密度上位4語を取り上げる。またこれに、現代の共通語と異なることが筆者の内省から推定される語および先行研究との比較に資する語を調査対象として加える。なお、五類とした「油×」「いとこ」「か

れい」「ざくろ」「襷×」「紅葉」「柱×」「枕」「わさび」、六類とした「団子」「長さ」「広さ」、七類「背中」「卵」は国語学会編（1980: 8f）には掲載されていないが、金田一（1974）に従いここに入れて扱うことにする。この金田一（1974）により分類された「油×」「襷×」「柱×」以外の×印は国語学会編（1980: 8f）によるものである。以下にその調査語を挙げる。

- 3拍名詞一類 魚・氷・羊・着物；形
- 3拍名詞二類 二人・小豆・とかげ×・二つ；間×・毛抜き
- 3拍名詞三類 力×・小麦×・二十歳・さざえ
- 3拍名詞四類 男・女・言葉・頭；戦・うずら×・扇・思い・敵・鏡・刀・境×・劍・袴・ハサミ・東・袋・仏
- 3拍名詞五類 心×・きゅうり・命・朝日；油×・いとこ・かれい・ざくろ・姿・襷×・涙・柱×・火箸・枕・紅葉・わさび
- 3拍名詞六類 うさぎ・ネズミ・きつね・カラス×；背中・高さ×・団子・長さ・広さ
- 3拍名詞七類 いちご・葉×・後ろ×・病；卵

さらに語類所属語彙以外の和語・漢語・外来語を『全国共通項目調査票』の調査対象語から、他の先行研究との対照に資することを優先して選定し、次の語を調査語に加える。

- 和語 落ち葉・お風呂・黄粉・眼鏡・浴衣
- 漢語 悪魔・映画・覚悟・金魚・景色・座禅・砂糖・時間・世界・太鼓・都合・電車・電話・豆腐・彼岸・廊下
- 外来語：ガラス・コップ・テレビ・バケツ・ボール・ポンプ・ラムネ

5.2 調査結果と考察

5.2.1 一様のアクセント型を示す3拍名詞

次の語は、多治見市全体で一様のアクセントが見られたものである。ただし、別のアクセント型で発音した人が各型1名の場合を含む。『NHK』に挙げられていないアクセント型を示した語に下線を付す。

- ①型 一類：魚・氷・羊 六類：うさぎ・ネズミ・きつね 七類：葉
漢語：太鼓・電話 外来語：ラムネ
- ③型 二類：二人・二つ 四類：男・女・言葉・頭（昭34m②型）・境（池37m②型、精40m①型、共47f①型）・袋（小34m②型）
漢語：豆腐
- ②型 三類：力（滝48m③型） 四類：うずら（南41m①型、精40m③型）
五類：心（南50m③②型併用）・油
漢語：砂糖

①型 五類：きゅうり（市44m）②型キウリ） 七類：病

漢語：景色・悪魔・金魚 外来語：テレビ・ポンプ

①型になったもののうち、一類・六類は中輪・内輪の東京式アクセントの地域としては予測どおりである。「菓」の七類も中輪・内輪では①型と②型が混じるものとされており、予測の範囲内と言える。

③型であったもののうち、二類は中輪式、四類はおよそ東京式全体における予測どおりの結果である。ただし「境」は『NHK』などで②型とされており、共通語では二重母音後半となる末尾のイの拍でアクセント核が避けられるが当地域では二重母音後半のアクセント核を避けることなく、四類の性質を全うして③型を保っていると考えられる。

②型となった各語類所属語は、みな東京において語類から予測される型となっていない、×印付きの語である。一般に東京で①型が予測される三類の「力」は『NHK』では③型、また東京で③型が予測される四類の「うずら」は『NHK』では②型、五類（東京では①型が標準ながら東京式諸方言では②型が標準とされる）の「油」は『NHK』で②型とされているが、これらが皆、多治見市全域で②型で発音されたのである⁶⁾。また、五類の「心」は『NHK』で②型と③型を併記しているが、これも市全域で②型であった。東京式において不安定なアクセントを持つ語が、当地域でこぞって②型になっているという印象を与える結果である。このうち「力」②型は金田一（1978）等で、「油」②型は柴田（1950）で尾張すなわち内輪式の特徴とされる。

①型であったもののうち五類と七類は東京で①型が一般的であり、『NHK』の記述も①型である。五類の「きゅうり」は「油」や「心」のように②型になったとすると特殊拍（長母音後半）にアクセント核が置かれることになるためか、1名（市44m）が②型で「キウリ」と発音したのを除いて①型であった。七類の「病」は、国語学会編（1980: 8f）に挙げられている語例の中で親密度の高い4語に入っているが、今回の調査対象者からは「あまり使わない」「言ったことがない」といった反応が多く聞かれ、読み上げてくれた人のアクセントがすべて東京と同じ①型になったことには、この馴染みのなさが影響していると思われる。

さらに、語類に属さない漢語や外来語を見てみると、ここに挙げられたものはすべて『NHK』等に記されている東京のアクセント型と一致する。

5.2.2 アクセント型にばらつきのある3拍名詞

次の語は、2名以上が多数派のアクセント型以外の型で発音したものである。多数派のアクセント型で分類して示す（異なる型の話者が同数の場合は同じ語類の語が多く属する型に便宜上含める）⁷⁾。また、この多数派の型が『NHK』に挙げられていない型である語に下線を付す。

①型が多数を占める語

一類：着物 (②型 2名)

二類：とかげ (③型 2名)

四類：扇 (③型 4名)・仏 (③型 8名・NA1名)

六類：背中 (①型 5名)・団子 (③類 5名)

七類：いちご (③型 12名)・後ろ (①型 14名)・卵 (②型 8名)

漢語：映画 (①型 2名)・時間 (①型 2名)・都合 (①型 15名)・電車 (①型 14名)

外来語：ガラス (①型 9名)・バケツ (①型 2名)・ボール (①型 2名)

③型が多数を占める語

一類：形 (①型 1名, ②型 13名)

二類：小豆 (②型 3名)；間 (①型 8名)・毛抜き (①型 8名)

四類：戦 (①型 7名, NA1名)・思い (①型 1名, ②型 4名)・敵 (②型 9名)・剣 (①型 16名,
②型 1名)・袴 (②型 5名)・東 (①型 10名, ②型 1名)

語類外和語：お風呂 (②型 2名, NA3名)

②型が多数を占める語

三類：小麦 (①型 9名, ③型 2名)・二十歳 (①型 17名)・さざえ (①型 11名)

四類：鏡 (③型 12名)・刀 (③型 13名)・ハサミ (③型 12名)

五類：命 (①型 11名)；いところ (①型 2名)・ざくろ (①型 10名)・姿 (①型 11名)・
襷 (③型 17名)・涙 (①型 8名)・柱 (③型 6名)・火箸 (①型 7名)・枕 (①型 7名)・
わさび (①型 10名)

語類外和語：黄粉 (①型 14名)・眼鏡 (①型 10名)・浴衣 (①型 3名, ②型 1名)

漢語：覚悟 (③型 1名, ①型 15名)・座禅 (①型 8名)・世界 (①型 16名)・彼岸 (①型 11名,
②型 1名)

①型が多数を占める語

五類：朝日 (②型 15名)；かれい (①型 2名, ②型 4名)・紅葉 (②型 16名)

六類：カラス (①型 5名)；高さ (①型 11名)・長さ (①型 7名)・広さ (①型 7名, ②型 2名)

語類外和語：落ち葉 (①型 3名, ②型 1名)

漢語：廊下 (①型 12名)

外来語：コップ (①型 6名)

以上60語のうち、地域による違いが見られるもの(北西部, 中央～東部, 南部の各地区で優勢な型の出現率に18%以上の開きがあるもの)には表8の30語がある。表8では、北西部15名：中央～東部9名：南部10名の各地域でそれぞれの型で発音した人数をこの順に示しており、空白のセルはどの地域でも該当する型の話者がいなかったことを示す。なお、2つの型を言った場合にはその各型で0.5人分として計算している。また、『NHK』により共通語のアクセ

セントとして挙げられている型のセルを濃い網掛けで示す（許容される型として同書において丸括弧で示された型は薄い網掛けで示す）。「共通語型」の列にはこの濃い網掛けされた共通語の型の出現割合（％）を地区別に示し、他の地域と比べて共通語型のアクセントを示す話者の割合が10ポイント以上高い地域の数値に下線を付す。

表8 3拍名詞アクセントの地域差（北西部：中央～東部：南部）

		①型	③型	②型	①型	共通語型（％）
一類	形	1:0:0	4:6:10	10:3:0		7:0:0
二類	間	3:1:4	12:8:6			20:11:40
二類	毛抜き	2:2:4	13:7:6			100:100:100
三類	小麦	2:5:2	0:1:1	13:3:7		13:67:30
三類	さざえ	1:0:0		8.5:6:8	5.5:3:2	37:33:20
三類	二十歳			6:4:7	9:5:3	60:44:30
四類	戦	1:4:2	13:5:8			100:100:100
四類	鏡		8:1:3	7:8:7		53:11:30
四類	敵		8:8:9	7:1:1		53:88:90
四類	刀		7:2:4	8:7:6		47:22:40
四類	剣	5:3:8	9:6:2	1:0:0		60:67:20
四類	袴		14:5:10	1:4:0		93:56:100
四類	ハサミ		7:1:4	8:8:6		47:11:40
四類	東	3:2:5	12:7:4	0:0:1		100:100:90
五類	命			12:5:6	3:4:4	20:44:40
五類	姿			12:5:8	5:4:2	29:44:20
五類	櫓		5:5:7	10:4:3		33:56:70
五類	柱		5:0:1	10:9:9		33:0:10
五類	火箸			10:9:8	5:0:2	33:0:20
六類	カラス	4:1:0			11:8:10	73:89:100
六類	高さ	5:2:4			10:7:6	67:78:60
六類	団子	11:8:10	4:1:0			73:89:100
六類	長さ	5:1:1			10:8:9	67:89:90
六類	広さ	3:1:3		0:1:1	12:7:6	80:78:60
七類	後ろ	10:6:4			5:3:6	67:67:40
和語	黄粉			8:4:8	7:5:2	47:56:20
漢語	覚悟			10:3:5	4:6:5	100:100:100
漢語	座禅	2:4:2		13:5:8		100:100:100
漢語	彼岸	2:6:3		12:3:7		100:100:100
外来語	コップ	3:3:0			12:6:10	25:33:0

共通語化の観点から、どの地域で共通語と同じアクセント型の割合が高いかを比較してみると、語によって違いが大きいようである。まず、『NHK』で1つの型を挙げる語について述べる。

一類「形」は市内どの地域でもほとんど共通語化が見られない。共通語と異なる②型と③型

について次節で検討する生年による分布を見ると③型のほうが後の世代で多くなっており、共通語の①型に近付いているように思われる。そうであるとすれば、③型の割合の高い南部から共通語に近付いている語であるかもしれない。なお、山口（1992）の中濃・東濃の調査では①型と③型各7名、②型3名と、少数ながら②型が見られる。その型の違いは生年とは相関がなく、地理的には①型と③型の分布は入り混じっているが、②型は美濃市・関・岐阜市という中濃の南部に固まっている。一方、名古屋市の調査（下野 1993）でも世代を問わずほとんど①型であって80名中②型、③型はそれぞれ1名ずつのみであるため、これらの資料からは②型もしくは③型が内輪式の特徴とも言えないようである。

二類「間」、四類「敵」、五類「命」、六類「カラス」「団子」「長さ」は南部で、もしくは南部から中央～東部にかけて共通語と同じ型の割合が高い。逆に三類「さざえ」「二十歳」と四類「剣」、六類「広さ」「後ろ」、それに「黄粉」「コップ」は北西部から中央～東部にかけて共通語と同じ型の割合が高い。この結果から、『NHK』記載が1つの型でありアクセントに地域的な偏りのある語（18語）のうち、多く（14語）が中央～東部を境にしていることがわかる。この境界は1拍二類名詞の場合と同様である。しかし、周辺方言に関する先行研究のデータと比較する限りでは、これらの3拍名詞全体を内輪／中輪の区分に結びつけることはできないであろう。

一方で、五類「姿」と六類「高さ」は中央～東部で共通語と同じ①型の割合が高く、四類「鏡」と五類「火箸」は中央～東部で共通語と異なる②型がほとんどである。名古屋市の1930～1950年代生まれが「姿」「高さ」を①型、「火箸」を②型で発音し、「鏡」は1940年頃生まれを鏡に③型から②型へ変わっている（下野 1993、鏡味・横江 1992）ことから、多治見市中央～東部に名古屋方面からの影響が考えられる。

また、『NHK』で2つの型が挙げられている語のうち、二類「毛抜き」、四類「東」はほとんど①、③いずれかの共通語型で現れるが、多治見市全体としては③型が多い。また、漢語「覚悟」も共通語と同じ②、①いずれかの共通語型が現れている。地域分布を見ると、「毛抜き」「東」は共に南部で①型、「覚悟」は中央～東部から南部で①型の出現割合が比較的高くなっている。

同じく『NHK』で①、③の2つの型が挙げられている三類「小麦」、四類「戦」、漢語「座禅」「彼岸」は、中央～東部とその他の地域とでアクセント型の分布に違いが見られ、中央～東部で①型が比較的多い。なお、これらの語は次節で取り上げる生年による差のある語にも数えられ、より若い世代で①型が増している。

五類「櫛」「柱」は共通語型のうち①型がまったく見られない。名古屋では「櫛」が③型、「柱」が②型（下野 1993）であり、この名古屋型が多治見市中央～東部と南部で多くなっている。

一方で、『NHK』で③型が挙げられ②型が《許容》とされる四類「刀」「袴」「ハサミ」は、中央～東部で②型の割合が高い。このうち、「ハサミ」は中濃・東濃でも（県の最東部で中輪

式とされてきた加子母・付知・中津川に③型が見られる点を除く)ほとんど②型である(山口1992, 小川1999)が, 「刀」「袴」は全員③型(山口1992)である(ただし瑞浪(小川1999)では「袴」で②③型が混在)。これに対し, 名古屋では3語とも②型が優勢になってきている(鏡味・横江1992)ことから, ②型が主に名古屋方面とのつながりのある多治見市中央部で早い時期に取り入れられることも自然であろう。ただしこれについても次節で取り上げる生年の差を考慮する必要がある。

なお, 「刀」は数値から『NHK』が掲げる③型が北西部と南部で高いように見えるが, 南部と中央～東部では小学校区によって型の出現がはっきりと異なっており, ③型は南部では市之倉小学校区4名全員, 中央部では昭和小学校区の3名中2名に限られる。昭和小学校区北部は土岐川右岸にあって北西部の精華小学校区と隣接しており, 昭和小学校区南部は市之倉小学校区と接している。精華小学校区から昭和小学校区を通して市之倉小学校区へは国道248号のほか1928年から1978年まで東濃鉄道笠原線があり, こうしたつながりが一部の語におけるアクセントの共通性をもたらすことが考えられるかもしれない。

5.2.3 生年による変動の検討

本稿では世代の差が明確になるような調査の設計をしておらず, 調査対象者の年代の幅が狭いが, 結果として前節に挙げたばらつきのうち世代差が要因となっている可能性が示唆されるものを以下に挙げ, 今後の世代間調査の基礎とする⁸⁾。以下では, 1934年～1944年(戦前・戦中)生まれ17名と1945年～1955年(戦後)生まれ17名とを比較して, 一つの型に3名以上の増減がある語について検討する。

まず, 戦後生まれで①型が増加している語を見てみよう。表9では各世代の各型の出現数と①型の出現率を示す(NAは数に含めない)。

表9 戦後世代で①型が増加した3拍名詞

語類	三類	四類	漢語	漢語	漢語
語	小麦	戦	座禅	都合	彼岸
戦前・戦中	① 3 ② 14	① 2 ③ 14	② 17	① 8 ① 9	① 1 ② 15 ① 1
①型率	18%	13%	0%	47%	6%
戦後	① 6 ② 9 ③ 2	① 5 ③ 12	① 8 ② 9	① 11 ② 6	① 10 ② 7
①型率	35%	29%	47%	65%	59%
『NHK』	②①型	③①型	①②型	①型	②①型

『NHK』はこれらの語のうち「都合」以外について①型を含む2つの型を表示しているが、『新明解』は「戦」を③型、「小麦」「座禅」を②型としつつ《新は》として①型を挙げている。馬瀬・佐藤編（1985）を見ても「戦」「小麦」は下の世代で①型が増しており、「座禅」「彼岸」はほとんどの世代で①型になっていることから、少なくともこれらの語は東京において平板化の傾向にあると見られる。馬瀬・佐藤編（1985）の調査時から時を経ていることも考えると、多治見におけるこの①型の増加も共通語の影響である可能性がある。ただし、東京等と同様に内因的な平板化が起きている可能性も否定できない。

また、「都合」については、共通語と同じ①型へ向かう変化であることが明らかである。名古屋市での調査（下野1993）でも①型から①型へ変化し、1926年以降の生まれでは①型はほとんど消失している。本調査でも1912年以前の生まれでは6名中5名が①型であるが、1913年以降では28名中9名と激減し、高い年齢層で①型に入れ替わっていると見られる。

ところで、漢語の「座禅」「都合」「彼岸」はすべて軽音節+重音節の構造を持っているが、このことはアクセントの変化に影響を及ぼすだろうか。同じ条件の「時間」は元から①型であり（戦前・戦中と戦後の各世代に1名ずつ①型が見られる）、②型の「砂糖」には平板化が見られず、後で見るように「世界」は①型が増加していることから、この事例からだけでは音節構造の影響を考えることは難しい。むしろ、「座禅」「砂糖」「彼岸」等でもともと②型が優勢であったことと音節構造に関わりがある（秋永・坂本（2010: 47）によれば、1拍+2拍の漢語3拍語において「中高型は特にLHのうち長音、撥音を後部要素にもつ語に多くみられる」）と考えるべきであろう。

なお、戦前・戦中生まれの世代で②型が圧倒的に多い「座禅」「彼岸」については、奥村（1976: 257f）も取り上げているが、これについては後述する。

次に、戦後生まれで③型が増加している語について検討する。表10では各世代の各型の出現数と③型の出現率を『NHK』に挙げられている型と共に示す。二つの型の併用やNAはなかった。

表10 戦後世代で③型が増加した3拍名詞

語類	一類	五類
語	形	襷
戦前・戦中	③ 7	③ 6
	② 9	② 11
	① 1	
③型率	41%	35%
戦後	③ 13	③ 11
	② 4	② 6
	① 0	
③型率	76%	65%
『NHK』	①型	①③型

「形」は一類であることからそもそも②型の発音が優勢であった経緯が不明であるが、当地域では共通語の「かたち」の意味で「カタ」という語が用いられており、「形」という漢字を一度は「カタ」(②型)と読む被験者が数名いたことから、「カタ」(②型)のアクセントが「カタチ」と読むときにも影響を及ぼしている可能性が考えられる。前述のように、名古屋市でも共通語と同じ①型であり、共通語とも名古屋とも異なる③型の増加は、共通語の①型へ向かう過渡的な状態であろうかと推測される。

「櫛」は②型が予測されうる五類であり、それが「形」と同様に共通語化しつつあると見なすのは自然であるが、周辺の地理的分布も考慮してみたい。山口(1992)の調査では本稿の調査結果と同様に②型と③型(特に若い1971年生まれのみ①型)であり、各務原・関・加茂・御嵩・恵那という多治見を囲む地域が②型となっている。一方で名古屋市の調査ではほとんど③型である(80名中①型4名、①型②型各1名)ことから、周辺地域、特に名古屋方面の影響と見ることもできよう。

次に、戦後生まれで②型が増加している語について検討する。表11では各世代の各型の出現数と②型の出現率を示す。『NHK』欄の丸括弧内は許容される型を示す。二つの型の併用、NAは見られなかった。

表11 戦後世代で②型が増加した3拍名詞

語類	四類	四類	四類	五類	七類
語	鏡	刀	ハサミ	柱	卵
他の型	③型	③型	③型	③型	①型
戦前・戦中	②7 ③10	②7 ③10	②9 ③8	②12 ③5	②2 ①15
②型率	41%	41%	53%	71%	12%
戦後	②15 ③2	②14 ③3	②13 ③4	②16 ③1	②6 ①11
②型率	89%	82%	76%	94%	35%
『NHK』	③型	③(②)型	③(②)型	③①型	②(①)型

「鏡」「刀」「ハサミ」の3語は同じ四類であり、地域的には市の中央～東部で②型が多く(特に共栄小学校区と養正小学校区では3語とも全員が②型)、戦後生まれ世代で②型の勢いが増しているという共通点がある。このうち「鏡」は山口(1992)の中濃・東濃の調査では全員が③型となっている。一方で、鏡味・横江(1992)の名古屋市南区呼続よびつぎでの調査では、「鏡」「ハサミ」はおよそ1930年代生まれと1940年代生まれの間で、「刀」は1940年代生まれと1950年代生まれの間で③型から②型へ優勢な型が入れ替わっている。また、下野(1993)の名古屋市での調査では、「刀」は、1917年～1920年代生まれでは③型が9割、1930年代生まれで③型

と②型が各5割, 1940年代以降の生まれでは②型が9割と, 1930年代生まれ世代を境に③型から②型へ圧倒的に優勢な型がくっきりと入れ替わっており, 鏡味・横江(1992)の結果と変化の世代は多少異なるが, 同じ傾向である。今回の多治見市での調査では, 1934年以降の生まれを対象としており, そこから1944年生まれまで話者によってゆれのある世代が続き, その下の世代で②型が優勢になることから, 名古屋と近い世代で同じ変化が起きていることになる(ただし, 調査時期が異なることから, 変化が起きた時期も同じでは断言できない)。

「柱」は東京式諸方言では②型が一般的な五類に属しているが, 共通語では、『NHK』で③①型とされ、『新明解』では「柱」を①型としつつ《新は》として③型を挙げている。下野(1993)による名古屋市での調査では, 「柱」はどの世代でも②型が優勢であるが, 1960年代生まれ以降で③型, ①型が現れ始め, 1979～1980年生まれでは3割が③型となっている。1970年代半ば生まれを対象としたとみられる山田・正木(1999)の調査では, ②型67%に対して①型15%, ③型17%と, やはり共通語型が3割となっている。名古屋では1990年代当時の青少年に共通語化の方向の変化が起きているのに対して, 現在の多治見では70歳代よりも60歳代のほうが共通語にないアクセントを示していることになり, この結果からは共通語化が起きているとは考えにくい。他の世代の調査を待って結論すべき点である。

「卵」は②型が増加したと言っても35%にとどまることから, 意味のある変化ではないかもしれない。しかし, ①型が多かったことは柴田(1950)によれば岡崎などの特徴であり, 戦後世代でやや名古屋に近づいているということになる。なお, 馬瀬・佐藤編(1985)を見ると戦後生まれの話者ではすべて②型となっていることから, これについても, この下の世代でどのようになっているかが興味深い。

最後に, 戦後生まれで①型が増加している語について検討する。表12では各世代の各型の出現数(二通りの発音をした人は各0.5と計算)と①型の出現率を示す。NAはなかった。

表12 戦後世代で①型が増加した3拍名詞

語類	五類	五類	五類	五類	五類	五類	五類
語	朝日	命	ざくろ	姿	枕	紅葉	わさび
前・戦中	①7 ②10	①2 ②15	①3 ②14	①4 ②13	①2 ②15	①7 ②10	①3 ②14
①型率	41%	12%	18%	24%	12%	41%	18%
戦後	①11.5 ②5.5	①9 ②8	①7 ②10	①7 ②10	①5 ②12	①11 ②6	①7 ②10
①型率	65%	53%	41%	41%	29%	65%	41%
『NHK』	①型	①型	①型	①型	①型	①型	①型

語類	六類	六類	六類	六類	漢語	漢語
語	カラス	背中	高さ	長さ	覚悟	世界
戦前・戦中	①12 ②5	①1 ②16	①10 ②7	①12 ②5	①4 ②12 ③1	①5 ②12
①型率	71%	6%	59%	71%	24%	29%
戦後	①17	①4 ②13	①13 ②4	①15 ②2	①11 ②6	①11 ②6
①型率	100%	24%	76%	88%	65%	65%
『NHK』	①型	②型	①型	①型	①②型	①②型

まず、それぞれ程度の差はあるが、五類と漢語で②型から①型へ、六類で②型から①型への変化が目立つ。先に六類について検討する。

六類のうち「カラス」「高さ」「長さ」は、戦前・戦中生まれ世代でもすでに①型が多数派であり、戦後生まれでさらに増加しているものである。名古屋市調査（下野1993）では3語とも世代を問わずほぼ①型であり、世代による違いは見られない。山口（1992）では「カラス」の調査結果が掲載されており、明治生まれでは②型が多く、大正生まれでは①型が多いといった違いはあるが、地域的なまとまりがなく、世代差と言えるかどうかは不明である。

一方、六類の「背中」は全体で優勢な型も共通語も②型であり、①型が戦後世代で少し増加したということである。名古屋市調査（下野1993）でもほとんど②型であり、調査範囲で最も下の世代である1979年～1980年生まれのグループでのみ①型が15%まで上昇する。この「背中」について、江端（1981）は次のように述べている。

注目されるのは、中部地方の新潟県に顕著な分布が見える頭高型の[senaka▷]の存立状況である。中部地方の富山・石川・山梨県を除いた諸県域に、これが散在する。その頭高型の勢力は、新しいものようであり、新潟県や愛知県域での分布のように、平板型に対し、強く抵抗している状況が注目される。（江端1981: 246-250）⁹⁾

江端（1981）は、七類の「盥」にも生じているこの現象を「頭高型化」と呼んで中部地方の方言の「4つの注目すべき特色」の一つとして挙げ、方言地図上の多治見市や瀬戸市の辺りにも頭高型（①型）を標示している。共通語化への方向ではないが、江端（1981）にあるように「新しい」変化として「平板化に対し、強く抵抗している」のだとすれば、その原因は何であり、いつまで続いているのであろうか。これもより若い世代を対象に調査してみなければならないが、筆者の観察では、少なくとも多治見では①型は老年層のみのものであり、若い世代には引き継がれずに終わる変化であると見ている。

五類では、多くの語が戦後世代で共通語と同じ①型を増している。下野（1993）による名古屋市の調査でも、表12に挙げた五類の語のうち調査対象でなかった「わさび」を除いてすべ

て世代が下がるごとに②型が減少し①型が増している。さらに、多治見市では②型が主流でほとんど変化のなかった五類の「涙」「火箸」も名古屋市では①型が増加している。鏡味・横江(1992)では、「朝日」「命」「姿」「紅葉」「涙」「さざえ」「眼鏡」などがおよそ1950年代生まれと1960年代生まれの間、「枕」「火箸」などが1960年代生まれと1970年代生まれの間に、「わさび」は1950年代生まれの両用を経て、②型から①型へ優勢な型が入れ替わっている。よって、多治見においては共通語の影響とも名古屋方面の影響とも判断がつかないが、より若い世代にも続く変化であると見込まれる。

なお、江端(1981)は「命」「紅葉」を取り上げ、東京でも京阪でも①型である中で中部地方のほぼ全域で②型が用いられる状態を「中高型化」と呼び、これも中部地方の方言の「4つの注目すべき特色」の一つとしている。江端の調査対象者は1900年代後半から1920年代生まれと見られ、その世代の60歳代の時期の調査では②型が広く分布していたことがわかるが、現在の多治見では1930年代～1950年代生まれの60、70歳代で共通語と同じ①型に移行しつつあるようである。

この五類およびいくつかの漢語における①型の増加について、奥村(1976: 257f)は、20歳以上と20歳以下という括りで東濃地方のアクセントを世代間比較している。調査時期は不明であるが、仮に1970年代前半だとすれば1950年代前半生まれがその括りの境界となる。すなわち、「20歳以上」が本稿の被験者全体の層に世代として近いことになる。ここで、共通語が①型である五類の「命」「ざくろ」「姿」「涙」「火箸」、漢語の「悪魔」「覚悟」「景色」「世界」の奥村(1976)における世代差を本稿の調査結果と表13において比較してみる。表13の数値は①型の出現率である(「ざくろ」と「火箸」は③型または④型に相当する○●●型の話者もわずかにいるが、そのほかは①型または②型)。

表13 3拍名詞における①型の出現率(%)

	本稿調査：多治見		奥村(1976)	
	戦前・战中	戦後	20歳以上	20歳以下
命	12	53	0	34
ざくろ	18	41	28	75
姿	24	41	3	65
涙	18	29	3	10
火箸	24	18	0	7
悪魔	100	100	90	97
覚悟	24	65	6	59
景色	100	100	100	98
世界	29	65	3	39

表13から、元から①型が圧倒的優勢であった「悪魔」「景色」、ほとんど変化のない「火箸」を除いて、過去の東濃地方でも現在の多治見でも下の世代で①型化の傾向が見てとれる。

なお、奥村（1976）は、他のいくつかの漢語についても調査している。それによると、上で①型の増加について検討した漢語「座禅」「彼岸」は、2語とも②型が20歳以上87%から20歳以下57%に減少し、「○●●」（共通語と同型としていることから③型ではなく①型と推測される）が13%から43%に増加している。さらに、共通語が②型の「砂糖」は、20歳以上で69%だった②型（31%は○●●）が20歳以下では90%（10%は○●●）に増加している。奥村（1976）によるこれらの記述は総じて共通語化の方向に沿っている。

一方、多治見での本稿の調査では、共通語化の流れに沿った表9の漢語、表12, 13の五・六類と漢語に加えて、表11の四類に名古屋と変化を同じくする語が観察された。

6. 4拍名詞と5拍名詞のアクセント

6.1 調査対象語

4拍語と5拍語の調査対象語は、『全国共通項目調査票』から、共通語でなるべく多様なアクセント型を含み、先行研究との比較に資するように選定した。

調査対象語のうち4拍語は以下のとおりである。

和語：紫・鶏・杯^{さかずき}・ウグイス・タンポポ・のこぎり・雷・綿入れ・生き物・年寄り・
小刀^{こがたな}・つたち^{いろがみ}・色紙^{しろうと}・素人

漢語：あいさつ・正月・土曜日

外来語：コスモス・クレヨン・オルガン

調査対象語のうち5拍語は以下のとおりである。

和語：桜色

漢語：交際費・日記帳

外来語：コンサート・サングラス・アンモニア・ハーモニカ・マットレス・レストラン・
パラシュート

その他：シャボン玉・かっぱう着

6.2 調査結果と考察

6.2.1 一様のアクセント型を示す4・5拍名詞

以下の語は一貫したアクセント型で発音された（他の型での発音が各1名のものを含む）。

4拍語 ①型 にわとり・オルガン

③型 杯^{さかずき}・のこぎり

②型 生き物・ウグイス

①型 タンポポ・あいさつ

5拍語 ①型 桜色・日記帳・アンモニア・ハーモニカ・シャボン玉

③型 交際費・サングラス・パラシュート

①型 マットレス (小34m④型, 昭41m③型)・レストラン (昭41m③型)

4拍語③型の「杯」以外は共通語アクセントと一致している。「杯」は『NHK』で①型を掲載しつつ④型を許容しており、『新明解』は④型および《新は》として①型を挙げている。山口(1992)によれば中濃・東濃のうち美濃市・美濃加茂市太田町北町・中津川で④型, 美濃加茂市(白川町生まれ)・付知・各務原・瑞浪・岐阜市で③型であり, 多治見市の周辺には③型が分布しているようである。また, 名古屋市の調査(下野1993)では, 1960年代生まれまでは③型が優勢であるが, 1976年以降の生まれから①型が優勢となり, もとは③型であったと見られる。なお, 多治見市のうちでも特に市之倉地区は杯の生産地として知られるが, 市之倉の製陶業者も他地域の他業種の話者も一様に③型であり, 陶磁器の産地であることが影響しているかどうかは不明である。

6.2.2 アクセント型にばらつきのある語

次の語は, アクセント型にばらつきが見られ, 2名以上が多数派のアクセント型以外の型で発音したものである。多数派のアクセント型で分類して示す。

4拍語

①型が多数を占める語 雷 (③型4名・④型1名)

④型が多数を占める語 ついたち (①型2名・③型1名)・年寄り (①型1名・③型4名, トシヨリ③型5名)・綿入れ (①型9名・③型1名)・正月 (③型6名・①型1名)

③型が多数を占める語 色紙 (②型2名)・小刀 (②型5名)

②型が多数を占める語 紫 (①型1名・③型4名)・土曜日 (①型12名・①②型併用2名)・クレヨン (①型16名)

①型が多数を占める語 素人 (②型2名, シロト①型6名)・コスモス (②型3名)

5拍語

③型が多数を占める語 かつぼう着 (①型4名・⑤型6名)

①型が多数を占める語 コンサート (③型5名)

多数を占める型が『NHK』の記載と異なるのは, ①型が多数を占める「雷」(『NHK』③④型), ③型が多数を占める語「色紙」(『NHK』②型)と「小刀」(『NHK』②④(③)型)の3語であった。

このうち本調査で①型が多かった「雷」について, 『NHK』は巻末の新旧アクセント対照表で「雷」の①型を新しい型として掲載している。一方で馬瀬・佐藤編(1985)によれば東京でも多数派の③型に次いで④型と並ぶ数の①型が幅広い年代に現れており, ここで言う『NHK』

の旧版である日本放送出版協会（1974）『日本語発音アクセント辞典』第15刷では①型、③型、④型を挙げているとしていることから、東京におけるそれぞれの型の新旧の関係は見えてこない。県内では、山口（1992）の調査において中津川と各務原で④型、岐阜市で③型という『NHK』の記載する型が現れているが、残る美濃市、加茂、加茂（白川町生まれ）、付知、瑞浪の5名では①型であり、①型が広く認められている。結局、美濃地方でも東京でも①型はある程度認められるが、多治見を含む美濃地方のほうがよりその勢力が強いと言えそうである。

「色紙」は本調査では③型が圧倒的に多かったが、『NHK』『新明解』では②型のみが挙げられる。一方、山口（1993）では中濃・東濃の全調査地点共通で③型とあり、美濃地方に広がる特徴と言えるであろう。

「小刀」は本調査では③型が多かったが、『NHK』では②④型を掲げ、③型は《許容》の扱いである。一方『新明解』は③④型を挙げ、②型を新しいものとしている。馬瀬・佐藤編（1985）を見ると戦前・戦中生まれでは③型、戦後生まれでは②型が圧倒的に優勢である。これは、下で見る本調査の世代差と方向性が一致すると言ってよく、この地域の特徴としては未だ③型が強いということであろう。

次に、アクセント型にばらつきがあった語のうち、地区による偏りのあるもの（北西部、中央～東部、南部の各地区間の一つの型の出現率の差が25ポイント以上の語）について検討する。該当するのは、「綿入れ」「小刀」「紫」「クレヨン」の4語であり、その校区別の分布を表14に示す。表14では各小学校区3名（市之倉小学校のみ4名）中の、それぞれの型で発音した人数を各セルに記し、『NHK』による共通語の型を濃い網掛け、許容される型を薄い網掛けで示す。ただし各地区合計で1名以下の型は省略する。

表14 4拍・5拍名詞のアクセント型（地区別）

校区	北西部					中央～東部			南部		
	南	根	小	池	精	共	養	昭	市	滝	笠
綿入れ④型	2	3	3	2	2		2	3	3	1	3
①型	1				1	3	1		1	2	
小刀③型	3	3	3	3	3	2	2	1	4	2	3
②型						1	1	2		1	
紫②型	3	4	1	3	3	3	3	3	1	2	3
③型			1						3	1	
クレヨン②型	3	2			2	3	3	2	2	1	
①型		1	3	3	1			1	2	2	3

「綿入れ」は中央～東部で①型の出現率が比較的高いが、これについては後述するように世代差も影響すると考えられる。「小刀」は中央～東部で②型がまとまって認められ、東京の新

しい型がここにある。共通語にない⑩型が「クレヨン」は北西部と南部に分かれて現れ、「紫」はほぼ南部にのみ現れている。

最後に、生年による差が見られるもの（世代間で一つの型に3名以上の増減がある語）を表15に示す。表中、「優勢型」は今回の調査の世代合計で最も多かった型を示す。「戦前・戦中」「戦後」の行には現れた型とその人数を示す。

表15 4拍・5拍名詞のアクセント型（生年別）

語	綿入れ	小刀	紫	クレヨン	コスモス	かっぱう着	コンサート
優勢型	④	③	②	②	①	③	①
戦前・戦中	④ 13 ⑩ 3 ③ 1	③ 16 ② 1	② 12 ③ 4 ⑩ 1	② 7 ⑩ 10	① 14 ② 3	③ 11 ⑤ 5 ⑩ 1	① 13 ③ 4
戦後	④ 11 ⑩ 6	③ 13 ② 4	② 16 ③ 1	② 11 ⑩ 6	① 17	③ 13 ⑤ 1 ⑩ 3	① 16 ③ 1
『NHK』	④③	②④ (③)	②	②	①	③	①

全体的には優勢型からの逸脱が少なく、世代の差がはっきりしないものが多いが、「小刀」は前述のとおり東京でも②型が新しい型として現れており、同じことが多治見でも続いていく見込みがある。また、「紫」「クレヨン」「コスモス」「かっぱう着」「コンサート」では優勢型が共通語型と一致しており、それと異なる型が戦後世代で減少していることから、これも継続的な変化となると見込まれる。一方、「綿入れ」はその指示内容である衣服があまり用いられなくなりつつある現在、使用頻度の低下が考えられる（親密度4.250）。使用頻度の低い語は方言形が残りやすいだけでなく、共通語もその拍数・音節構造において多数派の型に移行する傾向が指摘されており、4拍語である「綿入れ」が⑩型に移行するのも自然なことであると思われる¹⁰⁾。馬瀬・佐藤編（1985）によれば東京でも③④型が優勢な中、1955年以降の生まれの人にも⑩型が現れている。

7. 月名のアクセント

本稿の調査の際、『全国共通項目調査票』以外の調査項目として、多治見市において共通語形と異なるアクセントが聞かれることの多い月の呼称（月名）のアクセントをすべて調査した。本節では「一月」から「十二月」までの月名のアクセントの調査結果を見る。

大まかに結果をまとめると表16のようになる。表16では現れた型を人数が多い順に掲げ、その右に人数を示す。

表16 月名のアクセント型

月名	一月	二月	三月	四月	五月	六月
型	②31 ④3	①33 ②1	③27 ①7	①34	①34	④33 ③1
『NHK』	④	③	①	③	①	④
月名	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
型	④33 ①1	④33 ③1	①33 ③1	④33 ③1	③18 ④15 ⑥1	③34
『NHK』	④	④	①	④	⑥	⑤

1名のみアクセント型を無視すると、結果が一様なのは3拍語「二月」「四月」「五月」「九月」の①型、4拍語「七月¹¹⁾」「八月」「十月」の④型、5拍語「十二月」の③型である。これは『NHK』記載の共通語のアクセントと一致するもの（「五月」「六月」「七月」「八月」「九月」「十月」）もあれば一致しないもの（「二月」「四月」「十二月」）もある。3拍語の①型と5拍語の③型が③型としてまとめられることを考え合わせると、この方言において拍数ごと（3、5拍語=③型、4拍語=④型）に水平化（leveling）が働いていることが窺える。なお、調査は「一月は多治見に行った」等の文を読み上げる形式で行っており、単語を連続して読んだ際に現れがちなアクセントの同化が起こったものではない。

一方、結果にばらつきがあるのは「一月」（②型31名、④型3名）、「三月」（③型27名、①型7名）、「十一月」（③型18名、④型15名）である。地理的には「一月」の共通語型の④型は北西部のみ、「三月」の共通語型の①型は中央～東部と北西部に見られ、南部は「一月」②型、「三月」③型でゆれがない。生年別に見ると「一月」の④型は1944年生まれ以降のみに現れ、「三月」の①型は戦前・戦中世代で17名中2名、戦後世代で17名中5名と増加しており、部分的な共通語化が考えられる。一方「十一月」は共通語型の⑥型は1名（昭48f）のみで、北西部の精華・池田・小泉小学校区と南部の笠原・滝呂に④型が多く見られ、その他の地区は③型が多いが、生年による違いは見られない。

ばらつきのあった語についても水平化の観点から考えてみたい。「一月」の②型はこれと連続する「二月」と同じく「月」の直前にアクセント核が来る③型という共通性があり、④型の発音には他の4拍語との共通性がある。「三月」の①型の発音（共通語とも一致）には連続する「二月」や「四月」等との共通性があるが、③型の発音からは、同じ音節構造を持つ4拍名詞「正月」で優勢な④型に次いで③型が6名見られたこと（6.2.2節）が想起される。また、今回の調査項目には入っていないが、筆者の観察では同じ音節構造（重音節+「月」）を持つ「先月」「今月」「来月」にも③型が聞かれることから、これらも一つの水平化によるものであるかもしれない（ただし、これになぜ「十月」が加わらないかの説明はできない）。「十一月」の③型の発音も④型（=③型）の発音も連続する「十二月」との共通性がある。こうした観察から、アクセント型が一

貫している語のみでなく、ばらつきのあるものについても水平化の検討が可能である。これについては、さらに他の複合語や助数詞を含めて考察する必要がある。

8. 地名のアクセント

多治見市内の地名のうち、市外の人々の発音にはしばしば「高田」①型および②型、「多治見」①型、「小泉」②型、「虎溪山」②型等のアクセントが聞かれるが、これは市民の発音の主流とは異なる。また、近隣の馴染み深い土地の名のアクセントが、テレビ放送のニュースなどで異なっていることがある。そこで、本稿では『全国共通項目調査票』とは別に、多治見市民にとって比較的なじみがあると考えられる地名のアクセントについての調査を行ったので、本節にて結果をまとめる。

大まかに結果をまとめると表17のようになる（拍数順）。表17では「型」行の各セルに現れた型とその人数を示す。「共通語型（推定）」は、『NHK』『新明解』で確かめられるもの（「長野」「名古屋」と鏡味（1965）の調査において地元外で観察された型（「春日井」「瑞浪」）のほかは、類似の語構成や音節構造を持つ他の地名から類推したものや、テレビ放送のニュースなどで耳にしたものであり、確定的ではないが、参考までに記す。なお、地名の読み仮名は調査対象者には示していない。

表17 地名のアクセント型

地名	と き 土岐 (市名)	ひ め 姫 (町名)	た か た 高田 (町名)	多 治 見 (市名)	長 野 (県・市名)	名 古 屋 (市名)
型	①33 ②1	②24 ①7	②34	①34	①23 ②11	①24 ②10
共通語型（推定）	①	①	①②	①②	①	①
地名	笠 原 (市名)	か す が い 春日井 (市名)	こ い ず み 小泉 (町名)	こ け い ざ ん 虎溪山 (山名)	み ず な み 瑞浪 (市名)	い ち の く ら 市之倉 (町名)
型	③28 ②6	①34	①34	①31 ②3	①33 ②1	③34
共通語型（推定）	②	②	②	②	②	③

町名の「姫」（南姫小学校校区）、「高田」（共栄小学校校区）、「小泉」（小泉小学校校区）、「市之倉」（市之倉小学校校区）および市内のよく知られた丘陵地「虎溪山」（精華小学校校区であるが、養正・共栄小学校校区が隣接する）は、その町や近辺に住んでいるかどうかとアクセントには関連性が見られず、多数派の型が多治見方言話者に共有されているアクセントであると考えられる。このうち「姫」は共通語的な①型が7名あったが、この中に姫町を含む南姫小学校校区の話者はいなかったものの、6名が南姫と同じ北西部の話者であった。

一方、最南部の町名「笠原」は全体としては地元らしい③型が多いが、市外の人にも聞かれる②型は南部（滝呂）で1名いたほかはすべて北西部（5名）であり、③型の浸透度に地域差があると見られる。笠原町は最も新しく2006年に多治見市に編入された地であり、このことが馴染み度に影響している可能性がある。また、「笠原」を「カサハラ」と言うか「カサワラ」と言うかは、多治見市民の中でゆれがある。今回の調査では「カサハラ」と読んだ人が18名、「カサワラ」と読んだ人が16名と拮抗しており、笠原小学校校区以外ではこの二つが入り混じっているが、当の笠原小学校校区の3名は「カサハラ」③型で発音した。また、「カサワラ」と読んだ16名中、15名が③型、1名が②型と偏りが見られた。

全体的にアクセントのばらつきが少ないため生年による差も小さいが、戦前・戦中生まれと戦後生まれで比較し、3名以上の差があるものについてまとめた表18を見ると、「長野」を除く3語では戦前・戦中生まれの方が共通語と同じ型を用いる人がやや多いようである。市内の地名は減多に放送で聞くことがない（東濃地方にはテレビ局が存在せず、地元のニュースがテレビ放送で取り上げられることが少ないという事情がある）ため、よほど体系的な変化が起こらない限り共通語化を受けないものと考えられる。¹²⁾

表18 地名のアクセント型（生年別）

	姫	長野	笠原	虎溪山
戦前・戦中	②12 ①5	①10 ②7	③12 ②5	①14 ②3
戦後	②15 ①2	①13 ②4	③16 ②1	①17 ②0
共通語型（推定）	①	①	②	②

一方、「名古屋」と「長野」はテレビ放送などで共通語形を耳にする機会があるため共通語化が起こりうると考えられる。実際、「長野」ではわずかながら戦後世代で共通語型①型が増している。しかし、表18に挙げていない「名古屋」はテレビで取り上げられることが非常に多いにもかかわらず戦前・戦中と戦後の生まれでまったく違いがなかった（両世代共に①型12名、②型5名）。これは、長野と違って名古屋が通勤・通学圏内にあり、テレビだけでなく日常会話にも頻出するため、方言形が保たれやすいという要因もあり、そのバランスの上に成り立っている状況と考えられる。

9. まとめ

本稿では、『全国共通項目調査票』およびアクセント語類から選定した1拍～5拍名詞のアクセントを中心に、多治見市の各小学校校区生え抜きの高齢層におけるアクセントの調査を行

い、実態を明らかにした。その結果、最も明確な地域差が現れたのは、内輪式と中輪式を分ける1拍二類名詞のアクセントであり、この点では土岐川右岸が内輪式、土岐川左岸が中輪式の特徴を示し、土岐川河岸の市中央部～東部はその混交状態であることがわかった。式の区別に関与するかどうか議論の分かれる3拍語については、地区によって偏りの見られる語があったものの、語によってその分布が異なることから、現段階では明確な結論は下せない。また、3拍語では土岐川左岸／右岸ではなく市中心部に共通語と同じ型や名古屋方言と同じ型が見られる語も存在し、他所からの影響を考慮に入れなければならず、複雑な状況が明らかになった。

拍数を問わず、共通語とされる型や東京での主流の型と名古屋の型が異なる場合、単に名古屋と同じ特徴を示すならば内輪式の要素である可能性もあるが、名古屋での世代変化に合わせて多治見でも変化が生じている事例（「鏡」など）は、内輪化というより名古屋化と呼ぶべきであると考えられる。これについて立証するには、さらに広い世代のアクセントについて調査しなければならない。

このように名古屋方面の影響を強く受ける背景には、古くから下街道等を通じた名古屋との行き来があり、さらに明治時代からは、主産業である陶磁器の通商が拡大したことに加え、現代の多治見市のベッドタウン化が挙げられよう。

このほか、本稿では、月の呼称のアクセントについて共通語にない水平化が見られることを指摘し、地名のアクセントにおいてテレビ放送などにおける出現頻度と方言アクセントの保持との関係について考察した。

最後に、1.3節で触れた山口（1992）をまとめた表3に加筆するならば、大まかに言って表19のようになる（動詞・形容詞については調査済みであるが、詳細は稿を改める）。

表19 多治見方言の位置づけへの試論（表3への加筆）

	尾張型内輪 (内輪式A型)	多治見 土岐川右岸	多治見 土岐川左岸	加子母村・ 大垣市内等 (内輪式B型)	中輪・外輪
1拍二類名詞	①	①	①	①	①
3拍一類一段動詞	②	①, ②	①	①	①
4拍一類一段動詞	③	①, ③	①	①	①
3拍一類形容詞	②	②	②	②	①
4拍一類形容詞	③	③	③	③	①

今後、多治見市のアクセントの位置づけを明らかにするため、名詞の世代別調査を行うとともに、疑問詞および動詞・形容詞の活用形のアクセントの分析を進める必要がある。

注

- 1) 金田一(1974)は3拍名詞の語類を「形類」「小豆類」「頭類」「命類」「兎類」「兜類」のように代表となる名詞によって名付けているが、本稿では便宜上、国語学会編(1980: 8f)による第一類、第二類等の呼称を「第」を省いた形で用いる。また、各類の所属語彙は諸論において完全には一致していないが、本稿では断わりのない限り国語学会編(1980: 8f)に準拠する。
- 2) 「ざくろ」(石榴, 栢榴)は字音語と見られるが、漢字の一般的な読みでなく認識の上での語構成が一般的な漢語と異なることから、和語に入れて扱う。
- 3) これを裏付けるように、小川(1999)は、高年層(64歳～80歳)の1拍二類名詞「名・葉・日・巢」は13名全員無核であるのに対して、中年層～高年層(48歳～74歳)対象の調査では有核と無核が混じり合っていると報告している。
- 4) 1934初頭における各小学校所在地の自治体区分は岐阜県地域計画局市町村室編『岐阜県市町村合併等経過一覧表平成18年3月31日現在』による。
- 5) 土岐川とほぼ平行にJR中央本線と国道19号線が走っているが、土岐川とJR中央本線が市の西部で南下しているのに対し、国道19号線はほぼ直線的に市の西部に抜けている。この2つの線に挟まれた土岐川の下流右岸は池田小学校区南部にあたるが、今回の調査では調査対象者が得られなかったため、この地域のアクセントは確かめられていない。よって、境界線が池田小学校区南部と市之倉小学校校区の境界(土岐川下流)に沿っているか、それとも国道19号線辺りに沿って校区を南北に分断しているかは断定できない。しかし愛知県各地に加えて多治見市でも調査を行った前川(1957: 222)のアクセント地図によると、「毛」「名」のアクセント境界線が瀬戸市と高蔵寺町(春日井市)との境から愛知岐阜県境を超えて多治見市市之倉小学校区と池田小学校区南部との境をなす土岐川の溪谷に入ったところで途切れていることから、1拍二類名詞の多治見市西部の境界線はこの両小学校区境にあると見て差し支えないと考える。
- 6) 江端(1981)は中部地方における中高型化と指摘している。
- 7) 前川(1957: 213)は「長沢・本宿・岡崎・拳母・足助・大高・高蔵寺・品野・多治見などで、主として『鏡・鉢』を、又場所により『刀・袴』をも中高型にする者があった。」と述べているが、「場所により」が多治見を指すのか、指すとしたらどの地区なのかは明らかではない。
- 8) 馬瀬(1983)によれば、長野市の調査において、第4世代(1934～1945年生まれ:本稿の「戦前・戦中世代」)にほぼ相当)と第5世代(1946～1957年生まれ:本稿の「戦後世代」)にほぼ相当)および第5世代と第6世代(1958年以降生まれ)とのアクセントの違いはそれ以前の世代間の違いと比べて大きく、「テレビの言語の影響によるところが大きいと判断する」と述べている。このことから、多治見においてもこの「戦前・戦中」と「戦後」の違いで後の世代に共通語と同じアクセントの増加が見られる場合には、長野市と同様のテレビの影響が考えられる。
- 9) 江端(1981)は調査の方法等については江端(1977)、江端(1978)に記しているとしており、江端(1978)によると、江端(1981)のもとになっていると見られる老年層の調査は1960年代後半から1970年代にかけて行なわれたものであり、対象者は60歳代の女性である。
- 10) 秋永・坂本(2010)によれば、4拍の和語・漢語名詞では①型が71.2%にのぼる。
- 11) 34名中33名がヒチガツと発音した。
- 12) 鏡味(1965: 67)では、大都市「名古屋」は現地で①型分布が縮小し②型が増しているのに対し「岐阜」の①型が変化しないことに触れ、「これは語音の安定性の如何よりも、大地名として頭高型の東京アクセントでしきりによばれる影響が大きな要因になっているのではないか。さほどマスコミにのらない地名がその現地音を中心としてむしろ広域に平板型で流通していることも考えられる。平板型の多治見を東京でタジミと頭高型によんでも、その発音が多治見方面の人々の耳に入ることは稀であるから変化に影響を与えない。要約すれば、東京頭高型一現地平板でマスコミによく頭高型として表われる大地名は東京アクセントの影響をうける可能性をもつ。」と述べている。ただし現在では最高気温のニュースなどで多治見の名が全国放送に現れることがしばしばあり、その際、多くは①型で発音されている。

付記

本研究は JSPS 科研費 25370427 の助成を受けたものである。

参考文献・資料

- 秋永一枝 (1958) 「アクセント推移の要因について」 國語學會編『國語學』 31: 17-27
- 秋永一枝編・金田一春彦監修 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』 三省堂
- 秋永一枝・坂本清恵 (2010) 『(新) 明解日本語アクセント辞典』からの報告』アクセント史資料索引別冊 5, アクセント史資料研究会
- 天野成昭・近藤公久編著 (2003) 『日本語の語彙特性』第 1 期 CD-ROM 版 (NTT データベースシリーズ), 三省堂
- 安藤智子 (2013) 「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』 58: 23-60
- 上野善道 (1982) 「新潟県における中輪・外輪アクセントの境界線」『金沢大学文学部論集・文学科篇 2』 A49-85
- 江端義夫 (1977) 「中部地方域方言の推量表現の分布について」 國語學會編『國語學』 110: 98-84
- 江端義夫 (1978) 「中部地方の打消過去表現について」 日本言語学会編『言語研究』 73: 1-20
- 江端義夫 (1981) 「中部方言の語アクセントの地理的分布」 日本音声学会編『音声の研究』 19 日本音声学会 pp. 239-254
- 小川綾子 (1999) 「方言の変化について—岐阜県瑞浪市より—」『名古屋・方言研究会会報』 16: 109-119
- 奥村三雄 (1976) 『改訂増補 岐阜県方言の研究』 大衆書房
- 鏡味明克 (1965) 「地名のアクセント—愛知岐阜両県による—」 東京都立大学國語国文学会編『都大論究』 5: 62-71
- 鏡味明克 (2003) 「愛知三重岐阜県境の固有名詞アクセントの変化」『名古屋・方言研究会会報』 20: 53-64
- 鏡味明克・横江美帆子 (1992) 「名古屋アクセントの年層変化」『名古屋・方言研究会会報』 9: 17-25
- 岐阜県地域計画局市町村室編 (発行年不明) 『岐阜県市町村合併等経過一覽表 平成 18 年 3 月 31 日現在』
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究—原理と方法』 塙書房
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』 岩波書店 pp. 129-180
- 金田一春彦 (1978) 「愛知県アクセントの系譜」 國語學懇話會編『國語學論集』 第一輯 笠間書院 pp. 1-19
- 金田一春彦 (2001) 「国語のアクセントの時代的変遷」『日本語音韻音調史の研究』 所収, 吉川弘文堂 pp. 303-332 (初出: 1960 年『国語と国文学』 37 (10) 至文堂)
- 國語学会編 (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版
- 柴田武 (1950) 「愛知縣のアクセントの分布」『文字と言葉』 刀江書院 pp. 267-312
- 下野雅昭 (1993) 「名古屋市多人数調査アクセント資料」『東日本の音声—論文編 (3) —』—主要都市多人数調査 (札幌市・名古屋市) 報告— 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」(研究代表者 杉藤美代子) A2 班「日本語音声における韻律的特徴: 東日本における音声の収集と研究」(研究代表者 加藤正信) pp. 87-120
- 杉藤美代子 (研究代表者) (1990) 『全国共通項目調査票 (1) 調査者用 改訂版』 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」
- 前川秀雄 (1957) 「尾張方言と三河方言の対立に関する研究」 日本音声学会編『音聲の研究』 8 千代田出版印刷 pp. 209-222
- 馬瀬良雄 (1983) 「東京における語アクセントの世代間推移」 井上史雄編『〈新方言〉と〈言葉の乱れ〉に関する社会言語学的研究』 昭和 57 年度科学研究費補助金 (総合研究 A) 研究成果報告書
- 馬瀬良雄・佐藤亮一編, 柴田武監修 (1985) 『東京語アクセント資料』上・下巻 (文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集)

- 水谷修 (1960a) 「名古屋アクセントの一特質 (前半)」『音声学会会報』 102: 8-10
- 水谷修 (1960b) 「名古屋アクセントの一つの特徴 (後半)」『音声学会会報』 103: 15-17
- 山口幸洋 (1984) 「愛知・岐阜のアクセント (1)」『名古屋・方言研究会会報』 1: 7-19
- 山口幸洋 (1985) 「愛知・岐阜のアクセント (2)」『名古屋・方言研究会会報』 2: 13-23
- 山口幸洋 (1987) 「岐阜県下のアクセント (1)」『名古屋・方言研究会会報』 4:10-24
- 山口幸洋 (1992) 「岐阜県下のアクセント (6)」『名古屋・方言研究会会報』 9: 43-54
- 山口幸洋 (2003) 『日本語東京アクセントの成立』 港の人
- 山田達也 (1992) 「長久手町若年層のアクセントについて」『名古屋・方言研究会会報』 9: 1-15
- 山田達也・正木悦子 (1999) 「名古屋地方における大学生のアクセント」『名古屋・方言研究会会報』 10: 1-9
- NHK 放送文化研究所編 (1998) 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』 日本放送出版協会